4つの課題をクリアするためのポイント・ヒント

参加してもらうための入り口を広げる

活動の楽しさや価値を知ってもらい活動に参加してもらう動機付けとして、"参加しやすさ"の訴求が重要である。主な要素としては、短時間でトライアルできる、決まりごとを多く作り過ぎない（安全の確保は必須）、多様な方々が参加できる内容（プログラム）、参加費が安価であること、一人でも参加できるなどが挙げられる。

参加者の声を聴き、ニーズに対応する

活動に参加してもらった方々に、参加の理由や期待していること、気づいたことや満足したこと、不満に思ったこと、その他の様々なニーズなどについて、出来るだけ直接的な対話を通じて聞き出すことが大切。そこには活動をより楽しく価値の高いものにするヒントがたくさん潜んでいる。それを次のプログラムの中でかたちにしていくことで、さらなる参加の動機付けやリピーター育成にもつながっていく。

参加者自身のやりたいことができる場にする

団体が企画したプログラムにただ参加してもらうだけではなく、参加者自身が実施してみたいことがある場合（リピーターになればなるほど出てくる）は、それらも実施できるような場や時間を設け、主体的に関わってもらうよう促していくことが大切。参加した結果、参加者自身が主体になれたと感じてもらうことで、一参加者からリピーターへ、リピーターから会員へ、会員からリーダーへと変わっていく可能性が高くなる。

活動の場に"学べる"をプラス

活動をする中であらたな気づきや、あらたな自分の可能性を発見できる学びの機会がたくさんあると、その場に身を置くことが快適になるとともに、活動を継続する理由がそこに生まれてくる。

地域のニーズにも対応する

森林や里山等のフィールドを活用する活動を行う場合、自分たちの「やりたいこと」だけではなく、地域住民や行政等のニーズがあるのであれば、それらを受け入れるということも大切。地域との合意形成は継続的活動には必要である。

活動資金を確保する

継続的な活動を行うにあたっては、活動資金を確保することも重要である。多少の縛りはあるものの受託事業や助成金をうまく活用することも考える。受託事業や助成金を活用するにあたっては情報収集と、行政・企業等とのネットワークづくりも重要なタスクとして捉えることが大切。なお、受託事業や助成金は、あくまでも自分達の「やりたいこと（活動）」を実現させるための手段（ツール）であり、単に組織を維持させるためのものではないという理解に基づいて活用する。

「やりたいこと」を実現するための組織をつくる

組織は「やりたいこと」を実現するためのものであるから、今の状況でどのようにすれば実現できるのかを考え、議論し、必要であれば組織のあり方を改善できるしくみやルールをつくる。そのためには、主要な主体者の役割を決め業務を分担することも大切である。つくった組織は、組織を維持させることを目的とするのではなく、活動を継続させていくためのものであることを忘れない。

ここでは、森林ボランティア団体等が共通して抱える４つの課題『①新規会員・参加者の確保』、『②継続的な活動』、『③後継者育成』、『④他団体、自治体・企業との連携』をクリアするためのポイントやヒントを、前頁まで紹介してきた各団体の考えや実際の取り組みの中で見えてきたキーワードを基に解説していきたい。

なお、“記されている内容すべてについて対応してほしい”、“対応すれば課題がクリアされる”というものではない。各団体の性格や特徴、抱えている問題等に応じて参考になりそうなものを選択、検討の材料としていただきたい。

実際に参加した人の声で広報する

活動の楽しさや価値を広めていくには、実際に参加した人の声に乗せて広報していくこと（いわゆる口コミ）が重要である。チラシ等の広報ツールを作成する際にも、いつ、どこで、誰が、誰を対象に、どのようなことを、いくらで実施するかということを掲載するだけでなく、体験者のリアリティある声や楽しさがイメージできる写真等を交えながら伝えることが大切である。

有償スタッフとして参加してもらう

ボランティア活動に興味や関心があっても、例えば経済的な理由で参加に踏み込めないという人（特に学生や若年層が多いと予測できる）もいる。その場合、参加するきっかけを提供するという意味も含めて有償スタッフとして参加してもらうという方法もある。無論、その資金をどこから捻出するかという問題はあるが、興味や関心のある方の意欲や情熱を活動の力に変えるという働き掛けを行なっていくこともボランティア団体の役割だと考える団体もある。

「やりたいこと」を確認する

そもそもボランティア団体は、共通の「やりたいこと」を持った人たちが集まっているのであり、それが何であるのかということを定期的に確認し忘れないということが大切である。（活動を継続していく中でお金や人がからんでくると、組織の維持や人間関係におけるしがらみ等にしばられ、やりたい活動を見失ってしまうことある）

活動のゴールや期限を決めて、終了したら一旦やめる

活動は継続することが目的ではないため、活動のゴールや期限を定めて取り組みそれが達成した時点で一旦やめて、その活動の成果や結果を評価することも大切。さらには、活動のマンネリ化やお金や人の問題で、やりたいことができなくなるのであれば、その活動をやめるという選択肢もある。その上で、その活動が本当に必要であるならば、また誰かが活動を始めるからである。

やりっぱなしにしない。どうだったか、改善することは何かを皆で議論する

実施した活動については、その目標が達成されたのか、どんな成果や結果、問題や課題があったのか等について、活動に関わった者全員でふりかえり、次に反映あるいは改善することを明確にする必要がある。それが成されているかどうかは、次の活動に参加した参加者にはわかるはずである。

参加者と楽しかったことを共有する

活動に参加して楽しかったことや達成感などは個々で感じるものであるが、それを参加者を含め皆で共有することも大切であり意味のあること。同じ空間・時間の中で同じ思いを、同じ感動をした人が他にいる、共感し合える人がそこにいると思えることは、そこにいる人や活動そのものの価値を高めることにつながる。

参加者が“楽しい”と実感できる活動にする

参加した者（実施主体者や一参加者などすべての方）が皆“楽しかった”と実感できる活動にすることを目指す。楽しさは達成感や充実感に置き換えても良い。そのためには実施主体者は無理をしない、また参加者には自由に楽しく主体的に活動してもらえる環境づくりが大切。できる範囲のことを皆で楽しめてこそ継続する活動に繋がる。

後継者育成

活動の場であると同時に教育の場にする

活動を通して、自分探しの場、あるいはあらたな成長の場になるよう意図して教育のしくみをプログラムの中に組み込む。企画を自分（達）で考えさせ、リーダーとして実行してもらい、成果や結果を検証させ、次のステージにステップアップする、いわゆる自己実現や成長のためのしくみ（ＰＤＣＡ）を取り入れることで、活動や組織の価値を高めることにつなげる。

多様な主体者と連携することで活動を広げ深める

一つのプロジェクトに様々な活動の主体者が関われるしくみ（例えば行政、ＮＰＯ、企業、森林組合、関連団体等の実行委員会や協議会）をつくると、様々な知恵や技術が融合されて活動が広域に広がったり、深まったりする。

また、そこから別の“面白いこと”が生まれ新たな活動としてスタートすることもある。連携にはそのような可能性を生み出す力があるともいえる。

ＷＩＮ－ＷＩＮの関係を共有

連携というかたちをとる場合、関係する団体それぞれのメリットとデメリットを検証し、事前に相互で共有しておくことが重要。

参加者に自分の居場所を見つけてもらう

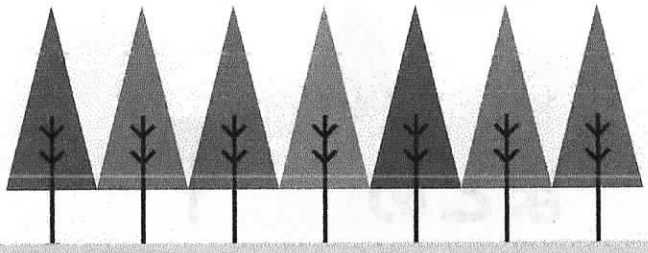
初心者、リピーター、リーダーそれぞれに参加してもらった活動の中で、自分の居場所（心地よいと思える場所や空間、時間等）を見つけだせる機会をできるだけたくさん提供する。

思想や価値観を押し付けない

活動（団体）のビジョンは明確にしつつも、活動経験の豊かな方や年配者の思想や価値観を若手や中堅で頑張っている人に押し付けてはダメ。そもそも皆自分でやりたいと思ったからこそ参加しているのであって、その思いや価値観を尊重しなければ“やりたい”という思いは薄れてくる。経験が豊かで知識や技術を持っている方だからこそ、若手や中堅で頑張っている方に寄り添っていくことが大切である。

共に汗をかくことが連携

連携とは、例えば企業や自治体等から単に資金面で支援をしてもらうことではなく、それぞれにやりたい事（活動そのものではなく活動のその先にあるビジョン）を達成するために提供できる資産（知恵、技術、資金等）を出し合って行動を起こすことと捉えられる。したがって共に汗をかいて互いのビジョンを達成していくことがまさに連携と言える。



また、次世代に繋ぐ「コンテンツづくり」と「組織づくり」に注目して活動事例を見てみると、右記のようなテーマやキーワードも見えてきた。

視点	テーマ	詳細例・キーワード
新たなコンテンツで参加者の裾野を広げる	子育て世代向け	森のようちえん、「月に一度は森づくり！」、市街地での子育てひろば等
	青年層向け	里山のしごとづくり、里山と関わるライフスタイル等
新たな視点で組織をつくる	若手を活かす組織づくり	事業部独立採算制、全体を後方支援する事務局等 「ピラミッド（代表裁量）型」から「プロジェクトリーダー型」の組織へ
	社会に繋ぐ組織づくり	「森の健康診断」、「森の子育てひろば」等。教育的課題や福祉課題等と森林づくりを組み合せ、行政や専門団体と連携強化

活動（団体）のビジョンは崩さない

活動のビジョンが明確かつ揺るぎないからこそ共感する参加者が増え、またその中で自分の役割ややりたいことが定まっていくので、活動（団体）のビジョン、目指すものは崩さないことが大切である。また、その中で活動（団体）の魅力がどこにあるのかも明確にする。

期待しすぎない

後継者を育成しようとするばかりに若手や中堅に期待しすぎてしまうと、それがプレッシャーとなり活動に取り組むことさえも嫌になってしまうケースは多々ある。そもそも活動が好きで集まってきた人たちなので、組織の事情に縛られることは好まないと理解し、何が何でも後継者を育成すると意気込まない、価値のある活動であれば自然と後継者は現れるという考えに立つことも必要なのかもしれない。

つなぎ役になるということもある

ボランティア団体の役割として、自分たちの活動に参加してもらうだけでなく、他の活動に参加したい人と別の活動を行なっている人や地域をつなぐプラットホームになるという考え方もある。

多様な参加理由、ニーズ等を理解する

継続して活動に参加する人は、参加する動機や理由、さらにはこんなことしてみたい等何らかの思いを持って参加してきているので、それらを掴み理解することが大切。自分の思いや考えを共有してくれる仲間がいるということは、組織としての魅力を引き上げることにつながる。そのためにも参加者や会員等と、日頃から良いコミュニケーションを図っておくことが重要である。

「やってみない？」という新たな可能性の扉を開かせる声かけは必要

若手・中堅の方が活動に取り組む中で、自分自身では気が付いていない個々の魅力や才能等を見つけ出し、押し付けにならない程度に、その人の新たな可能性を広げる動機付けとして、例えば「リーダーとしてやってみない？」等の声がけをしてあげることも大切である。

連携する相手とは対等な関係を維持することが重要

それぞれにやりたいことを実現するために連携というかたちをとるのであれば、当然ながら双方は対等な立場にある。

したがって、活動を進めていくうちに問題等が発生した場合には徹底的に議論し、合意形成を図りながら解決にあたることが大切。

まとめ

新規会員・参加者の確保
（NPO 法人いぶり自然学校）
（NPO 法人モモンガくらぶ）

継続的な活動
（NPO 法人里山倶楽部）

後継者育成
（NPO 法人よこはま里山研究所）
（NPO 法人モモンガくらぶ）

企業や自治体、他団体との連携
（矢作川水系森林ボランティア協議会）

4つのテーマ（課題）ごとに対する団体の考え方や取組みを紹介

“やってみたい！”気持ちを財産に

今回紹介した５つの団体も、時期や濃淡は違えど全ての課題にやはり直面し、打開策を試行錯誤してきている。そのときに共通することは、アンテナを高く張って、自団体の置かれている状況と地域のニーズを理解し、関わってくれる人の“個”に寄り添い、それぞれが“やってみたい”“一歩先へ進みたい”と思う環境づくり・組織づくりを行ってきたことではないだろうか。今まさに課題に直面していたり、ひと回り成長したい段階にあるとき、参考になるキーワードや活動事例を一助に“やりたいことが実現できる”ことを願う。